

## 現役若手プロ野球選手「セカンドキャリア」に関するアンケート

2012年10月に宮崎にて開催されたフェニックスリーグ中に、現役若手プロ野球選手に対して、今回で6回目となる「セカンドキャリアに関する意識調査」を行いました。以下、集計結果をご報告いたします。アンケート回答者平均年齢が23.7才と若いことから、本調査があくまで「若手プロ野球選手の意識調査」と限定的な位置づけであることを前提に、内容をご確認ください。

対象：フェニックスリーグに参加した**12球団所属選手に配布。うち、246名回収(有効n数=245)**

調査方法：無記名によるアンケート配布・記入方式

属性：

・平均年齢：**23.7才**(18～33才)

18～22才 = 81名

23～26才 = 109名

27～29才 = 38名

30才～ = 10名

・プロ野球平均在籍年数：**3.9年**(1～12年)

・入団前履歴：高校50.6% 専門学校0.9% 大学31.1% 社会人14.0% その他3.4%

・2012年度平均年俸：**934.7万円**

・独身既婚比率：73.3%・26.7%

・主なポジション：

投手／44.4% 捕手／14.0% 内野手／21.4% 外野手／20.2%

※本調査の集計結果は、小数点第二位以下を四捨五入して表記しております。予めご了承ください。

### 【全体サマリ】

- i 「引退後に不安を感じている選手」は、全体の71.5%。調査開始以降、下がり続けてきた、今回初めて上昇。(過去の推移は、75.8→76→74→72→70%)
- ii 「不安」の内訳は、進路と収入で91.2%。年俸が高いからといって、将来への不安が払しょくされるわけではない。
- iii 引退後の自分の進路について、相談する相手は「家族」が72.6%と圧倒的。高校・大学時代の監督が次に続く。
- iv 引退後の進路は、子供・高校・大学社会人・プロとカテゴリーによって差はあるものの、総じて「野球指導」の道に興味をもっている選手が多い。  
→一方、一番やりたいことは何か？と聞くと、「飲食店の開業」がトップとなった。
- v 「指導者」として現役プロ野球選手のイメージに一番近い存在は、「母校の高校球児の指導」だと思われる。

2013.1

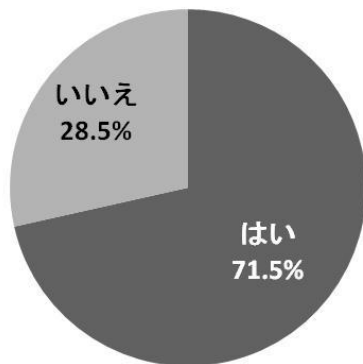
(社)日本野球機構 NPBセカンドキャリアサポート

■集計結果

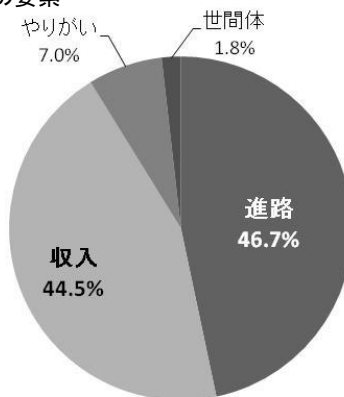
①「現役後」の意識について

【設問】 現役引退後の生活に、不安を持っていますか？ 不安があるとすれば、どれはどのような点ですか？

【図1】不安の有無



【図2】不安の要素



71.5%の選手が、引退後の生活に対して不安を感じている。【図1】

この数値は、この5年で75.8%→76%→74%→72%→70.0%と低下し続けてきたが、今年度は若干上昇した。

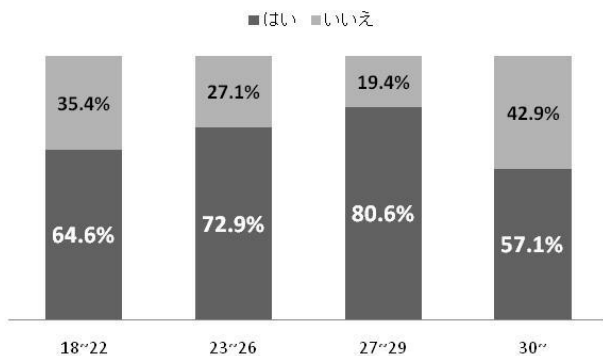
「不安がある」と答えた選手に、不安を感じる理由を聞いてみた(複数選択)。

「生活していけるか」といった収入面での不安と、「引退後、何をやっていけばいいのかわからない」といった進路面での不安を挙げる人で、あわせて91.2%。【図2】

生活していく上で必要な「収入」よりも、「進路」が不安要素の上位にくる傾向は今年も変わらず。

セカンドキャリア支援の現場で必ず選手が口にする「これまで野球しかやったことがない」に起因する不安の表出といえる。

【図3】年代別不安有無

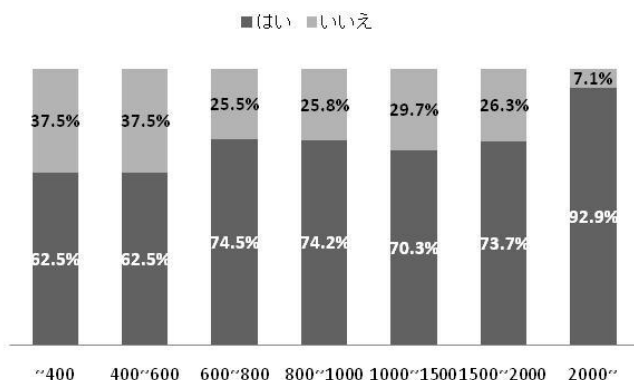


サンプル数が10名と少ないものの、前回の調査で全員「不安」と答えていた30代選手のうち、半分近くが「いいえ」と答えた。【図3】

プロ野球選手引退時平均年齢29才は変わっていない。たまたま、「楽天的な30代」が今年は多かったのか。データだけでは判別できず、これ以上のことは不明。

加齢ではなく、年収との関係性を見てみたところ、高い年齢が不安を払しょくするというものでもないらしい。

【図4】年俸別不安有無



むしろ、年俸が高くなるほど、「不安」と答える比率が増えており、2000万以上の選手のうち、92.9%が「不安」と答えている。

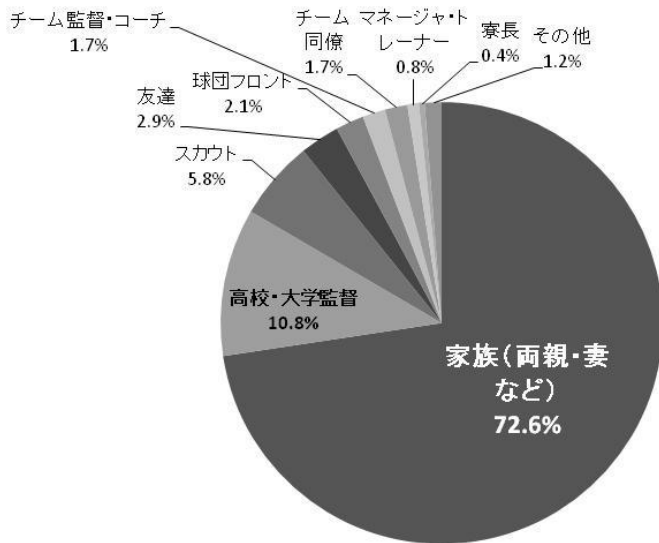
最も「不安」と答えた比率が低いのが、年俸400万円以下及び400~600万円のゾーン(ともに62.5%)。

この傾向は昨年度も同様で、やはり秋季教育リーグという場の特性から、このゾーンに多く含まれる育成選手が「不安」よりも「希望・期待」に満ち溢れて参加している、といえるかもしれない。

## ②相談相手について

【設問】あなたが「戦力外通告」を受けたとします。今後の自分の進路について、具体的に相談する相手は誰ですか？

【図5】最初に相談する相手は？



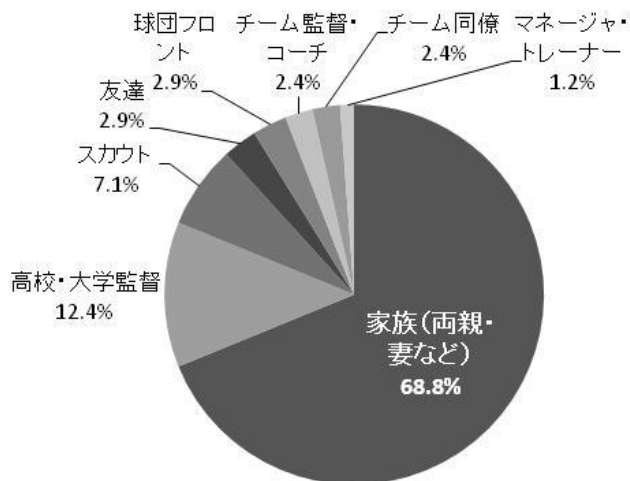
今年度は、設問の文言を若干変更した。「進路について具体的な相談相手は？」と、具体性を求めることで、より現実的・実践的な情報収集先がわかるのでは、と期待した。

しかし、結果的には昨年度と同じ内容となった。圧倒的に多かったのが「家族」で72.6%。高校・大学監督が10.8%、スカウトが5.8%と続き、この順番は変わらない【図5】

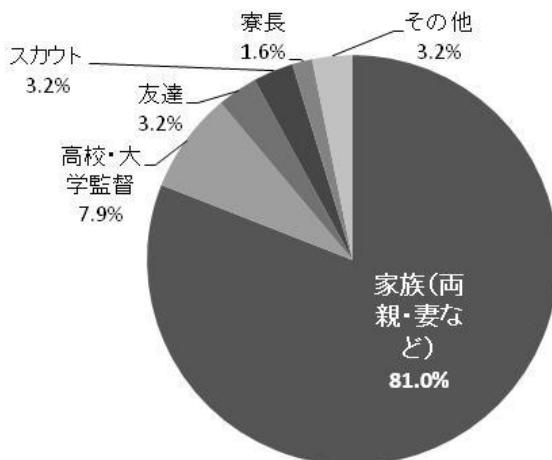
これを既婚者・独身別でみる【図6、7】。独身者の傾向は昨年度と変わらないが、既婚者の「最初に相談する相手:家族」が88.4%から81.0%と大きくポイントを下げた。「友達」「寮長」などが相談相手としてポイントを上げており、相談先の多様化が若干進んでいるといえるかもしれない。

「高校・大学の監督」は、前回と変わらず。高校・大学時代の監督が、実際にどのように進路相談に応じているのか、掘り下げてみたいところ。

【図6】最初に相談する相手～独身者の場合



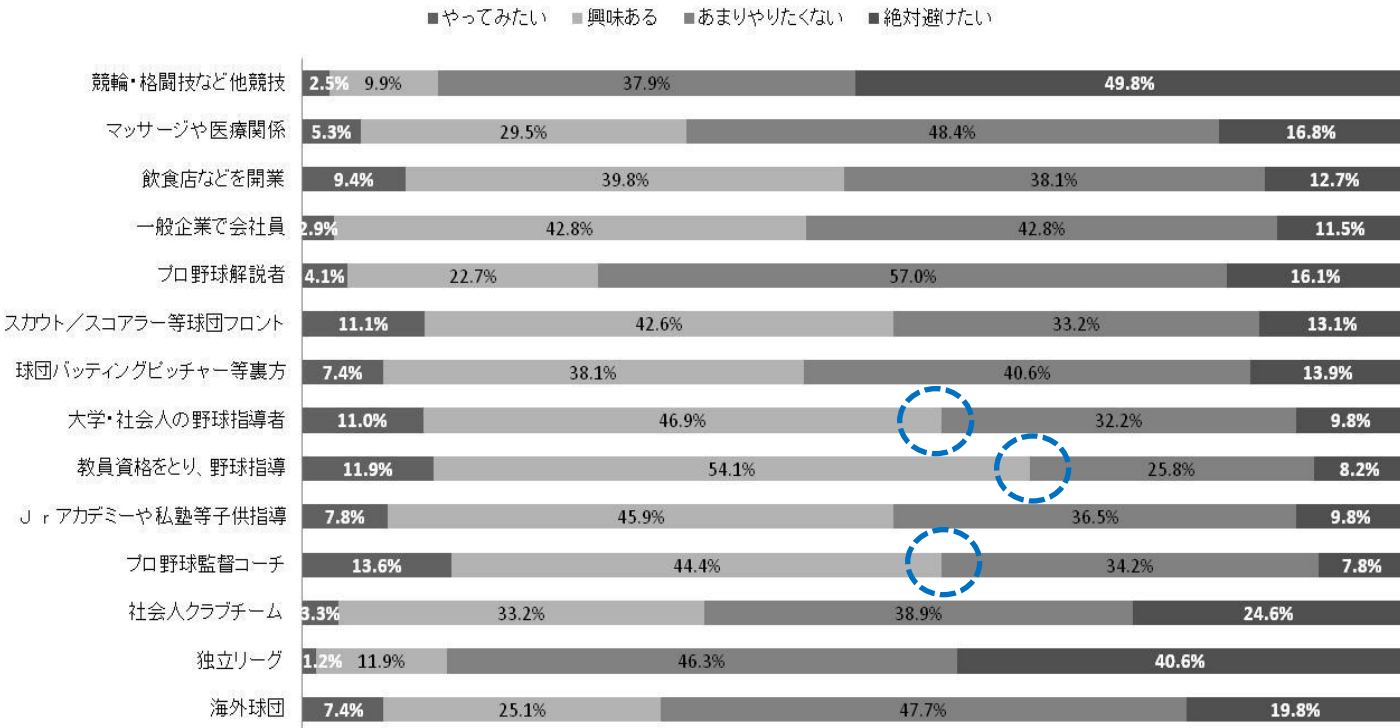
【図7】最初に相談する相手～既婚者の場合



### ③引退後の職業意識について

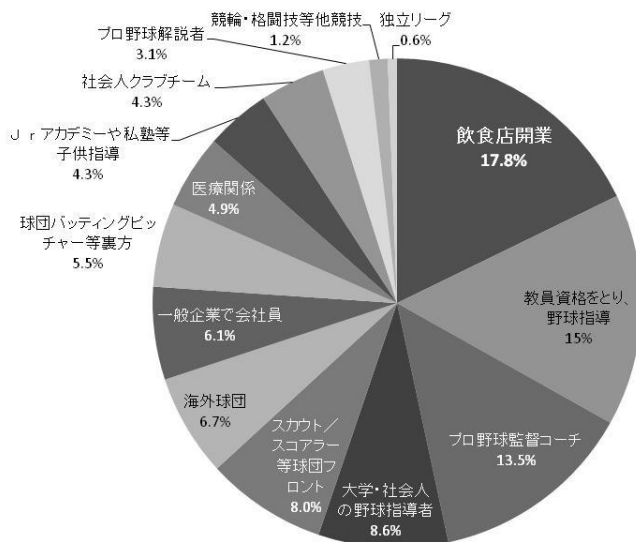
【設問】プロ野球選手を引退した後、どのような仕事をしてみたいと思いますか？ それぞれの仕事に対して、当てはまる気持ちに○をつけてください。

【図8】引退後の仕事



「やってみたい」「興味あり」の合計で順位をつけると、これまでの調査と同様で、野球指導の道を希望する選手が多いことがわかる。前回の第四位は「スカウト・スコアラー等フロント」だったが、今回は「Jrアカデミーや私塾等子供指導」が4位となった。対象が子供であれプロであれ、野球指導を志すプロ野球選手のマインドは変わらない。

【図9】引退後、一番やってみたい仕事



しかし、「引退後一番やってみたい仕事」については、これまでの調査でずっと「一番」だった「高校野球指導」が2位になり、飲食店開業がトップとなった。【図9】

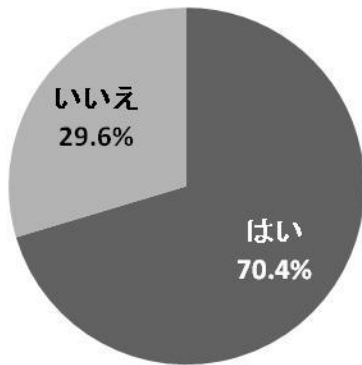
今回、職業選択の項目を「高校野球指導者」から「教員資格を取り、野球指導」と変えたことによる影響が大きいと思われる。高校野球指導の道に進みたい気持ちは変わらないものの、実現するために必要な「教員資格取得」が、「高校球児に教えたい」という純粋な思いに対して、敷居を高めているのではないかと。もしくは、「高校野球指導」と「教員資格取得」が、単純に選手の頭の中で結びついていないことも予想される。

漠然とでも興味をもっている「引退後の仕事」に、アプローチするために、プロである時期からどのような備えをしていけるか。選手が準備すべきアプローチの具体性を少しでも高めていくことが、セカンドキャリアの重要な役割といえるかもしれない。

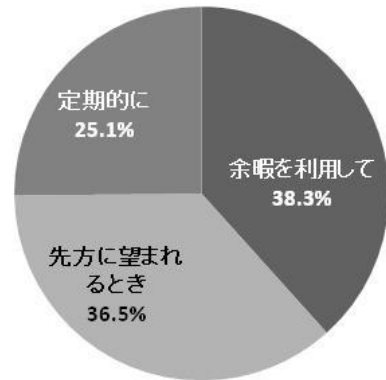
## ④引退後の野球普及活動について

【設問】現役を引退した後、野球普及活動に関してのご意見をお聞きます。

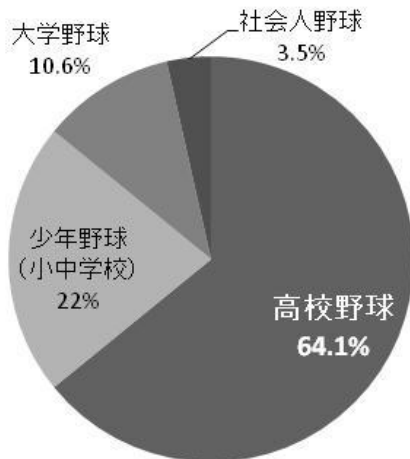
### 1. 野球普及活動をしたいですか？【図10】



### 2. (はいの方に対して)どのような関わり方をしたいですか？【図11】



### 3. 技術を生かすにあたり、どのようなクラスで行いたいですか？(複数回答可)【図12】

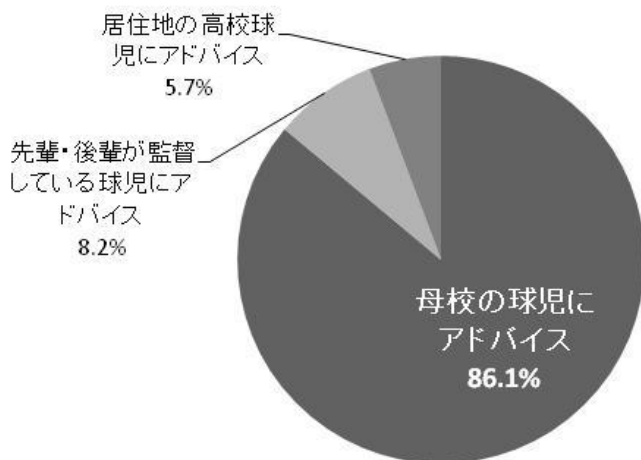


今回の調査では、「野球の普及活動」というテーマで別途質問を加えた。

前項の設問にあったように、多くのプロ野球選手が「野球指導」という道に興味を抱いている。そのような中、野球普及活動をしたい、と考えている選手が70%という事実を「多い」とみるか「少ない」とみるか。もう少し具体的な関わり方を提示することで、詳細がわかるかもしれない【図10】。

また、自身の技術を誰に対して生かしたいか、という設問については、やはり高校野球がダントツの1位となった【図12】。

### 4. (3で、高校野球と答えた方に対して)どのような関わり方をしたいですか？(複数回答可)【図13】



さらに、関わり方について尋ねたところ、「母校の球児にアドバイス」が86.1%【図13】。

日本の野球の頂点に立つプロ野球選手。これまでの、また今回の調査によっても、引退後は、自分の技術を指導者として後進に伝えたい、と強く思っていることがわかる。

指導者としての理想は、やはり母校を甲子園に導くことなのだろう。プロ野球選手の原点に、常に高校野球が存在しているといっても、過言ではないように思う。